



実行といっても、誰が、何をすればいいのか。  
地域の実情と課題を的確にとらえ、  
その対策を導き出すことが必須である。  
先進事例に学ぶのは、カスタマイズするためだ。

## 第2部

# こんなことやってます! 自助と互助

- 農福連携で障害者の自立と地域の活性化を  
どりーむ・わーくす（北海道余市町）—— 56
- 高齢者の買い物を宅配便とスーパーと社協が代行  
岩手県西和賀町社会福祉協議会—— 64
- 仮設に寄せ集められゼロから築いたコミュニティ  
あすと長町仮設住宅（仙台市）—— 73
- 障害者も高齢者も子どもも集まり自然に交流する場  
三草二木西圓寺（石川県小松市）—— 83
- 患者の「ものがたり」を共に読み解き最期まで寄り添う  
ナラティブホーム（富山県砺波市）—— 90
- 医療から生活まで住民と専門職が共に支える  
埼玉県幸手市杉戸町—— 97
- オール市民発で普段着の支援から地域包括ケアまで  
埼玉県鶴ヶ島市社会福祉協議会—— 104
- 住民が参加するカフェと生活支援で団地暮らしを支える  
高島平団地（東京都板橋区）—— 112
- 堀も門もなく地域と交流できる社会型老人ホーム  
株式会社誠心（福岡県太宰府市）—— 121
- 地域共生先進地の住民による住民のためのケア拠点  
いつでんどこでん（熊本県山鹿市）—— 128

労働力不足に悩む農業と福祉が手を携える「農福連携」を活用して  
地域共生・活性化を目指して活動している「どりーむ・わーくす」。  
法人理事長の水尻宏明さんにその思いを聞いた。

# 農福連携で 障害者の自立と 地域の活性化を



みずしりひろあき  
**水尻宏明さん**

どりーむ・わーくす（北海道余市町）

取材・文／宮下公美子  
写真／戸木誠

東京の情報関連企業勤務だったが、障害を持つ長男の将来を思い、実家のブドウ農園を継ぐ。前職で培った人脈と情報収集力等を活かし、農福連携を推進する。

## 49歳で農家を継ぐ 障害を持つ子のため

農福連携に取り組む特定非営利活動法人「どりーむ・わーくす」（北海道余市郡余市町）理事長の水尻宏明さんは、ブドウ農家の4代目だ。父親の代で農家を終えるつもりで、東京の情報関連企業に就職。しかし、30歳を過ぎ、子を授かったことで気持ちが変わる。長男に自閉症があつたからだ。

「もし知的な障害があつたら、何か息子が生きていくための場を作らなくてはいけない。そう考えたとき、実家の農地を活用することを思いついたんです」と水尻さんは言う。

取り組む覚悟を決めたのは、40代の半ばを過ぎてから。東京の会社を退職後、フリーの広告ディレクターとして北海道で活躍していたときだった。

これから就農して、障害を持つ子どもたちの自立の場所を作ること。水尻さんがそう伝えると、両親は「そんなことは誰かに任せたければいい」と答えた。3人の子の父となっていた息子の生活を慮っての言葉である。しかし水尻さんは、それに真っ向から反論した。

「何かあると、みんなよく、誰かがやってくれれば、って言いますよね。じゃあ、誰かっていつたい誰なんだ、って。それは国なのか。自治体なのか。そういうじゃない。誰かじゃなく、まづ自分だと。僕がそれをやるのに一番ふさわしい立場にいるのだから、その“誰か”は僕なんだ、と伝えました」

2011年、家族を札幌市内

に残し、49歳で新規就農。水尻さんは、父親から農業技術を学ぶ。2年間みつちり農作業を教えてもらうはずが、両親の病気により実際には1年3ヶ月しか実地での指導を受けられなかつた。



↑ 農園では、障害者やその家族、水尻さんの知人たちを招いて、苗を畑に植える体験会「定植体験」なども行う。水尻さんが運転するトラクターに乗って、畑へGO！



2017年6月に行った定植体験の様子。秋には収穫体験も行う。こうした体験会を通して、健常者と障害者との自然な交流を図る

ブドウに米。作物ごとに異なる作業は、1年あまりでは到底覚えきれない。助けてくれたのは、親の代からつきあいのある、近隣の農家だった。

「水尻のところの息子が帰ってきてやっているなら、ちょっとサポートしてやろうって。ものすごく周囲に助けてもらいました」

サポートを受ける一方で、水尻さんは、自分で情報収集し、新しいやり方を模索した。

たとえば、周囲の農家は誰もやっていない、水稻の直播栽培。田植えをする従来型の米作りでは、4月末に糲を蒔き、ビニールハウスで4週間、細かい温度管理をしながら苗を育てる。春先にさまざまな作業が重なるブドウ農家にとつては、非常に負担の大きいやり方だ。

「でも、5月末に田んぼに直播きにすれば、手間暇を掛けて苗を育てる必要も、田植えをす

る必要もない。ずっとブドウの作業に専念できるわけです。大幅な省力化が図れます」

前職で培った情報収集力や人脈を生かし、水尻さんは、障害者の自立につながる農福連携のあり方を模索していく。

## できるか辞めるか 大胆な試験栽培で判断

最初の2年間、水尻さんが考えていたのは、ブドウと米を中心とした農福連携だ。それぞれの作業を細かく分類して、障害者ができること、条件付きでできること、できないことを整理していく。

「生食用のブドウの場合、商品に傷がつくと売り物になりません。だとすると、収穫や選果の作業は、障害を持つ人にはなかなか任せにくい。ブドウと米だけでは農福連携は成り立たないことが2年間でわかりました」



↑→黒いビニールシートは、マルチと呼ばれる農業資材。保温、保湿、防草などの効果があり、苗が育つ



実験栽培からいきなり10倍の広さでのトライアル。水尻さんの勇気のある決断だ

そう思っていたとき、地域農業改良普及センター<sup>\*1</sup>から調理用トマトの実験栽培の提案があつた。提供した畑の一部で、センターが実験栽培を行うというのだ。栽培を手伝いながら様子を見ていた水尻さんは、翌年、調理用トマトの栽培導入を決める。4反（1200坪）でトライアルする、と宣言したのだ。実験栽培をしたのは、4畝（120坪）程度。いきなりその10倍での挑戦だった。

「1反程度では、何かトラブルがあつても、力尽くでクリアできてしまします。それではトライアルになりません」

できる見通しが立つなら本格導入。ダメならやらない。それを、1年で判断するためのトライアルだった。

## 根拠のある単価設定で作業工賃を決める

翌年、水尻さんは4反の畑に

5000本のトマトを植えた。本来なら、26トン程度の収穫が見込める量である。しかし、この年、収穫したのはわずか3トンだつた。といっても、栽培に失敗したわけではない。

「知的障害のある子たちが作業をしたら、どれぐらい採れて、いくらぐらいの仕事になるのか、やってみたんです」

収穫作業でもトライアルを行つたのだ。水尻さんは自ら理事を務めていた障害者団体などに協力を要請。7日間、延べ60人以上の障害を持つ人たちが収穫作業に参加した。

トマトは、収穫作業に慣れたパートの女性だと、1時間に60kgほど採る。

「知的障害を持つ子どもたちも、1時間に25～35kgほどを採ることができました。1kg10円の単価設定なら、時給に換算すると250～350円になります」



↑→果肉が多く果皮が厚い調理用トマトは、コロコロ転がしても傷がつかず扱いやすいのが特徴。2016年の収穫体験から



カゴメ株式会社マーケティング本部通販事業部商品企画グループ部長の吉田知史さん。「通販事業部では新事業『農園応援』をスタートしました。水尻さんの農福連携活動を今後も応援します」

農家は作業工賃の妥当な額がわからない。一方、障害者施設は、利用者の仕事が欲しいから、依頼があればとにかく引き受けたい。そのため、このような時給の設定が生まれてしまうのだ。

そこで水尻さんは、障害者に農作業の発注が来たら、まず発注者自身の作業効率を数値化してもらうことを提案する。たとえば、発注者が1時間の作業でトマトを70kg収穫できる場合、

「実は、施設外就労にきてもらった障害者施設に、これまでにも農作業を請け負っているか聞いてみたんです。すると、受けているけれど時給が100円に届かないというんです。驚きました」

障害者の就労継続支援B型<sup>\*2</sup>で、1ヶ月100時間作業した際の工賃は、全国平均約1万5000円（2015年度）。時給換算で150円程度だ。それよりはずっと高い工賃を設定できる。

<sup>\*3</sup>

「実は、施設外就労にきても

らった障害者施設に、これまでにも農作業を請け負っているか聞いてみたんです。すると、受けているけれど時給が100円に届かないというんです。驚きました」

農家は作業工賃の妥当な額がわからない。一方、障害者施設は、利用者の仕事が欲しいから、依頼があればとにかく引き受けたい。そのため、このような時給の設定が生まれてしまうのだ。

そこで水尻さんは、障害者に農作業の発注が来たら、まず発注者自身の作業効率を数値化してもらうことを提案する。たとえば、発注者が1時間の作業でトマトを70kg収穫できる場合、

1kg12円の単価にすれば、時給は北海道の最低賃金786円（2017年9月現在）を上回る840円となる。実際に発注する際の時給や単価は、これをベースに考えればいい。

農福連携に合う作物を創意工夫で栽培

4反の農地に調理用トマトを作った14年、水尻さんはもう一つ別の調理用トマトの実験栽培の依頼も受けていた。カゴメの高級トマトジュース用のオリジナル品種である。35本の苗の栽培を引き受けた。

支柱を立てずにカボチャのよう



2017年6月の定植体験は、途中からいにくの雨となったが、参加者は土とのふれあいを楽しんだ



定植体験には親子で参加する人も多い



参加者の送迎は、農園近くにある北星余市高校が協力。元校長がマイクロバスの運転手役を買って出た。こうしてどりーむ・わーくすの活動を応援する協力者は多い

は、生食用とは栽培方法が異なる。当時、水尻さんの周囲に、調理用トマトの栽培を手がける農家はなく、誰からもノウハウは学べなかつた。そこで水尻さんは、栽培費用を受け取る代わりに、カゴメ側に調理用トマトの栽培ノウハウを求めた。

カゴメ株式会社マーケティング本部通販事業部商品企画グループ部長の吉田知史さんは、当時を振り返つてこう語る。

「基本的な栽培指導は行いましたが、最終的には育てる人の腕が物を言います。この品種は当社が10年をかけて開発しましたが、本州の栽培環境ではうまくいきませんでした。水尻さんは、栽培の仕方を自分でもかなり研究し、創意工夫を重ねていきました。相当の努力がなくては、成功しなかつたと思います」

この年、北海道内4カ所で行った実験栽培の結果、質、量ともに最もよい栽培成績だったのも

は水尻さんの農園だつた。そしてこの品種の栽培は、水尻さんの農園が担うことになつた。翌年は300本、収穫量1トン分の試験栽培である。ここでさらに栽培ノウハウを蓄積し、3年目の16年は、収穫量10トンの契約栽培となつた。17年は、余市他の農園でも栽培を開始。障害者の働く場をふやしていきたいという、水尻さんの望む方向に向かつてている。

水尻さんは、農福連携のための栽培作物を導入する際、3つの条件を設定している。まず、必ず手作業があること。次に、栽培管理が楽なこと。そして、加工特性が高いことだ。

作業を機械化できる部分が多い作物だと、障害者の仕事が発生しにくい。そのため手作業があることは必須条件だ。また、今後、多品目を栽培していくことを考えると、栽培管理はできだけ楽な方がいい。そして、



「なつのしゅん」という調理用トマトから作ったトマトジュースは、パスタなどの調理にも使われる



トマト栽培に熱心に取り組む水尻さんだが、実はトマトジュースは苦手。しかし、自分の手がけた品種で作ったトマトジュースはおいしく飲めるという



2016年秋の収穫体験の様子。地這いの茎になったトマトをひねって収穫する

北海道では、農作業ができなくなる冬にできる作業が必要だ。加工品が作りやすい作物なら、通年での作業を確保しやすい。

「調理用トマトは、支柱を立てる必要もなく、脇芽も取らないなくてよく、手間がかからないんです。加工品もいろいろ作れます。ヘタが実に残らず簡単にボンボン採れますし、果皮が厚く硬いので、生食用のトマトのようにぶつかって傷がつくこともありません。農福連携には、とても向いている作物なんです」

15年には、前年以上に多くの障害者が水尻さんの農園を訪れた。工賃が発生する「施設外就労」では延べ90人以上。ボランティアで収穫を楽しむ「収穫体験」では、延べ150人近く。参加を募る告知には、広告ディレクター時代からの知り合いが力を貸してくれた。

こうして、水尻さんは、障害者の自立支援の準備を着々と進

なる冬にできる作業が必要だ。加工品が作りやすい作物なら、通年での作業を確保しやすい。

「調理用トマトは、支柱を立てる必要もなく、脇芽も取らないくてよく、手間がかからないんです。加工品もいろいろ作れます。ヘタが実に残らず簡単にボンボン採れますし、果皮が厚く硬いので、生食用のトマトのようにぶつかって傷がつくこともありません。農福連携には、とても向いている作物なんです」

めていく。

## 農福連携の現場を知り農家の目にも変化が

16年11月、水尻さんは「どりーむ・わーくす」を設立。17年9月には、就労継続支援B型事業所を開設した。福祉農園整備の交付金を活用し、収穫物の加工用機械など必要な設備も揃えはじめた。いよいよ、障害者の支援に本格的に取り組める環境

が整いつつある。

これまで代々、自然と向き合って、作物を育ててきた農家には、町育ちの人たちに農業などできなないと思っている人が多かった。ましてや障害者にできるとは、なかなか思えないのは当然のこととも言える。

「それが、実際にうちの畑で農作業をしている様子を目の当たりにすることであれ、できることかな？」と思いつけています。カゴメというブランドが一

緒に関わり、僕がやっていることの話が農協からも出るようになつたりして、周囲の農家の見る目が少しずつ変わってきているのを感じますね」

水尻さんは今年55歳。それでも地域では最年少の農家だ。

「この地域では、僕が子どもたちが、今も現役で頑張ってくれています。でも、今後はだんだんしんどくなっていくでしょう。遊休農地も増えていく可能性が高いです」

遊休農地は、この地域の場合、

更地にして賃貸に出しても、1反(300坪)の賃料がわずか1万円程度にしかならない。

「でも、僕に農地のまま貸してくれたら、調理用トマトで1反あたり30万円の売り上げを上げられます。施設外就労で来てくれた障がいを持つ人たちに工賃を支払つても、粗利が15万円は出ます」

たとえばその半分を農家に賃料として支払うとする。そうすれば、障害者は働く場と工賃を得られ、国民年金で生活している老農家は現金収入が得られる。どちらもハッピーになれる仕組みだ。

「農福連携なら、こうして農地を農地として活用して、農家にきちんとお金が入る仕組みを作れます。地域農業を支えることができるわけです」

## 障害者の就労を 地域全体に

水尻さんは、将来的には、個々の農家に、障害者を派遣する法人を町に作れれば、と考えている。

「その法人で雇用して、人手がほしい農家に派遣するんです。その方が個人で雇用するより、障がいを持つ人たちの就労が地域全体に波及していきます」

ツチングできるコーディネーターが必要だ。そう考えて、北海道の学校法人に、コーディネーターを養成する学科の創設を提案したこともある。

\*<sup>1</sup> 地域農業改良普及センター…都道府県が設置し、農業者に対する情報提供、新規就農者への相談対応などをを行う機関。  
\*<sup>2</sup> 就労継続支援B型…障害者に就労の機会を提供する事業のうち、雇用継続を結ばないもの。  
\*<sup>3</sup> 施設外就労…障害者と障害者施設職員が一緒に農家や企業等に出向き、請け負った作業を行う活動のこと。

# 人口が減少する余市を

## 農福連携で再び元気にしてみたい

「どりーむ・わーくす」理事  
棟敷隆司さん



棟敷隆司さんは長くコンピュータ関係の仕事をしてきた



↑定植体験では、参加者に調理用トマトを用いた料理を提供。調理を担当したのは、棟敷さんの声かけで集まった、棟敷さんと水尻さんの中学校同級生の女性たちだ



←定植体験後の食事の調理には、どりーむ・わーくすの取り組みに賛同する北星余市高校が、調理室を開放してくれている

「どりーむ・わーくす」理事の  
棟敷隆司さんは、水尻さんの中  
学の同級生。農作業を指導する  
職業指導員を担つてもうため、  
水尻さんが口説き落とした。

実は棟敷さんも、長く企業に  
勤めてきた農家の息子だ。しか  
し、病気の母の看病のため、2  
017年4月から2年間、会社  
を休職し、単身で実家へ。今は  
母を看ながら、高齢化で人手の  
足りない近所の畑を無償で手伝  
う日々を送る。

「20代のときに就職先で子会  
社を作つて、そこでずっと好き  
な仕事をしてきたんです。それ  
が最後、本社に呼び戻されて。  
正直なところ、不本意でした。  
だから、本社での仕事が片付い  
たとき、残りの人生は楽しい仕  
事をしたいと思つたんです」

水尻さんと棟敷さんが生まれ  
育った余市町は、この40年で人  
口が3割以上減つた。2人の子  
ども時代、500軒近くの出店

が出ていた余市神社のお祭りも、  
今では出店が10分の1程度の寂  
しい姿となつた。この地域のた  
めに自分にできることはないか。  
農福連携を通じて少しでも人口  
をふやせないか。町に戻つた棟  
敷さんは、衰退する我が町を目  
の当たりにしてそう考えた。そ  
して、35年務めた会社を辞め、  
「どりーむ・わーくす」の事業  
に専念することにした。

「80歳になる叔父が、今もブ  
ドウやサクランボ作りを手伝つ  
てているんです。心配して一緒に  
手伝つていると、叔父が言うん  
ですよ。隆司くんが一緒にやつ  
てくれるから俺は元気なんだつ  
て」

自分の存在が高齢の叔父を支  
えている。その事実に棟敷さん  
は大きなやりがいを感じている。  
そして自分自身もまた、80歳を  
過ぎても農業を続け、次世代へ  
とつないでいくのだと、心に決  
めている。